

氏名	近藤 悟
学位の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	甲文第89号(文部科学省への報告番号甲第319号)
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2010年3月3日
学位論文題目	ミヒヤエル・エンデにおける社会批判について
論文審査委員	(主査) 教授 木野 光 司 (副査) 教授 倉賀野 安 英 名誉教授 鎌 田 道 生

論文内容の要旨

本論文は、20世紀後半のドイツを代表する児童文学作家、ファンタジー文学作家であり、脚本家でもあったミヒヤエル・エンデ (Michael Ende, 1929-1995) が、その幻想作品および戯曲作品においておこなった「社会批判」の有り様をテーマとして取り上げたものである。

本論文は、大きく2部構成からなっており、第1部では、成立が比較的早い時期にあたる散文作品を取り上げている。筆者は第1章ではエンデの社会批判の原点をなす、幼少年期のナチス支配下での体験を伝記的資料を参考にして明らかにしている。第2章ではファンタジー作家エンデの名前を確立した作品『モモ』(Momo, 1973) における社会批判の特徴を分析している。エンデはこの作品において「時間泥棒」、「モモ」という人物像によって、労働、時間、効率、貨幣、計量化思考などにとらわれている現代社会システムの問題を明らかにしたと結論している。エンデは1970年代においてすでに、このような戦後社会の有り様をすでに開始された「第三次世界大戦」と見なし、『モモ』という作品においてその問題提起をおこなったとしている。第3章ではエンデの散文遺稿集に収録された未完の初期作品『だれでもない庭』(Der Niemandsgarten, 1998) を取り上げて、作家エンデの最初期の社会批判に関する検討をおこなっている。この作品の前半部分と『モモ』とに共通する社会批判的テーマとして、戦後ドイツで大量に建てられた無機質な高層アパート、集合住宅、規格化された都市の否定的描写、それによって生じた人間疎外の描写が見られることを作品の記述に即して明らかにしている。また筆者は、『だれでもない庭』の後半部に見られるファンタジーの国「だれのものでもない国」が、『モモ』に続く成功作『はてしない物語』(Die unendliche Geschichte, 1979) に描かれる幻想的の国「ファンタージェン」と共通の関心から形成されていること、すなわち現代人が直面している「心の荒廃」、「内面の崩壊」という問題が描かれていることを、両作品のテキストの具体的な比較によって明らかにしている。

第2部の第1章では、第1部第1章の伝記的考察を受けて、第二次世界大戦後から『モモ』によってドイツ児童文学賞を受賞するまでのエンデの俳優、戯曲家、作家修業時代を彼の社会意識との関係で考察している。第2章では、上演されたものとしてはエンデの処女作となる戯曲『遊戯をだめにする者』(Die Spielverderber oder das Erbe der Narren, 1967) が試みた社会批判の内容とその失敗に終わった原因についての考察がなされている。エンデはこの作品において富豪の遺産に群がる相続人達をグロテスクに描き出そうと試みたのであるが、演出、構成、その他諸々の事情でその上演は失敗に終わったという。この章では、プレヒトの演劇手法と初期エンデの演劇観との葛藤についても詳しく検討がなされている。第3章では、

エンデの第2の戯曲『サーカス物語』(Der Gauklermärchen, 1982)における社会批判についての考察がおこなわれている。経営難に陥ったサーカス一座が大手化学会社から好条件の宣伝の仕事を提供される。しかしその会社がかつて毒ガス漏出事件をおこし、団員を含む多くの市民にガス中毒を引き起こした会社であることが明らかにされるという設定が、エンデの環境問題意識の表現になっているとされる。そこから、エンデは資本・産業社会の根本的否定なしに、環境問題は解決できないと考えているという結論が得られる。第4章でも、第3章と同様の問題意識が取り上げられている。エンデの第3の戯曲『魔法のカクテル』(Der satanarchäolügenialkohöllische Wunschpunsch, 1989)は、悪魔と結託する魔術師の話である。魔術師が悪魔との契約を果たすべく地球環境を悪化させる企てを一夜にして実現する「魔法のカクテル」を作ろうとする。動物たちが魔術師に立ち向かい、陰謀の阻止に成功するという結末を持つ寓話劇である。筆者はこの劇においても、人類が現在の資本主義体制を壊す「社会的破局」か、現体制を継続したあげくに直面する「環境的破局」のいずれかを選び取らざるを得ないとエンデが考えているという結論を導いている。第2部最終章である第5章では、『鼠捕り男—ハーメルンの死の舞踏』(Der Rattenfänger. Ein Hamelner Totentanz, 1993)が考察の対象とされている。資本主義社会の強欲な支配層の姿を鼠退治の報償金の支払いを惜しむハーメルンの市長やその取り巻きの姿として描き、鼠捕りが子供達を現実の彼方のユートピア的世界へ送り込むというエンデ独自の解釈と筋立てによって、最晩年のエンデが、現実の金融資本主義体制から逃れられない社会に決別し、残された唯一の希望である次世代の人間への希望を表現していると結論づけている。

論文審査結果の要旨

本論文は、近藤悟氏が本学大学院に入学して以来十年以上にわたって取り組んできたエンデ研究のまとめであり、長年の研鑽を窺わせる包括的で詳細なものになっている。

ミヒヤエル・エンデは、ファンタジー作品『モモ』、『はてしない物語』およびそれらの映画化によって大変有名になった作家であるが、作家の本国ドイツにおいては必ずしもその知名度に相応しい評価を得ていない。近藤氏は作家エンデの伝記的考察をおこなっている第1部第1章、第2部第1章においてエンデの伝記に関わる事実を丹念に拾い上げ、ドイツでエンデの評価が高まらなかったさまざまな理由を明らかにしている。これが本論文において評価できる最初の点である。

近藤論文は、第1部においてエンデの散文作品を取り上げ、それぞれの作品を「社会批判」との関連で考察し、作品が当時のドイツで受けた文学的評価の紹介および社会批判という観点から見た場合の論者の評価を詳しくおこなっている。特に主要三作品における「社会批判」の視点と内実をテキストに沿って具体的に対比することによって、エンデが1970年代に抱いていた問題意識を明らかにしていることも評価に値する。

さらに近藤論文は、従来日本ではごく少数の愛好者にしか関心を持たれなかったエンデの戯曲作品を網羅的に取り上げ、それら戯曲作品に、散文作品よりも明確に1980年代以後のエンデの問題意識が表現されていることを明らかにしている。比較的晩年に書かれたこれらの戯曲作品は、舞台設定と結末こそ異なれ、いずれも世界や一国の支配層による犯罪と貧困国、貧困層の搾取、利己主義に起因する環境破壊、富裕層による利権確保と金銭欲という近年ますます露わになってきている人間の「心の荒廃」、「内面の崩壊」を主題としていることを詳細な論証によって明らかにしている点が本論文において最も評価すべき点である。

以上、本論文において評価すべき点を三点に要約したが、幾つかの問題点が、論文本体および試問において見いだされた。まずなによりも筆者が長年このテーマと取り組んできた割には筆者自身の見解が打ち出されておらず、ドイツおよび日本の研究者の見解を踏襲している部分が多かった。二次文献を渉猟して多くの情報を収集していること自体は評価できるが、それらの細部にこだわりすぎて、論者自身の作品との対峙がおざなりになっている章も見うけられた。もう一つの問題は、エンデの「社会批判」という興味深い研究デー

マを設定しながら、そのテーマが20世紀後半のドイツ社会というコンテキストの中でどのような意味を持っていたのか、なぜエンデの主張が戦後ドイツ社会に顧みられることが少なかったのかという所まで考察が及んでいないことである。

この二点は大きな問題点であり、今後筆者が研究者として自立する上で取り組まなくてはならない課題であると考えられる。しかし、これらの問題点を勘案しても、本論文が博士論文としての水準をクリアーしていると評価できる。本論文審査委員三名は、論文の審査並びに2010年2月17日に実施した口頭試問の結果により、近藤悟氏が本論文によって博士（文学）の学位を受けるに値すると判断したので、その旨ここに報告申し上げる。